耳順

院宣

永生

二五　死と永生

死は生きとし生けるものの免るべからざる運命なり。それ唯免るべからざる運命なり。故に又避くべからざる問

題なり。されど世に生を悔しむ人はあれども死を悔しむ人は少く生に就いて慮る人はあれども、死に就いて考ふる人は稀なり。訝しからずや。

宿罪

「如何にして生くべきか。」是人生の大なる疑問なり。然れども如何にして死すべきか。」は更に大なる疑問には非ざるか。吾等は歴史を讀みて大なる宗教の起るを見たり。されど宗教とは、生きんが爲の教に非ずして死せんが爲の悟なり。釋迦は人生の四苦に感じて解脱の途を說きぬ。耶蘇は同胞の宿罪を購うて永生の道を開きぬ。解脱や、永生や、死を外にして何の意義かある。最も賢き人の說ける哲學の旨趣も亦是に外ならざるなり。天地人生の理法を明らかにするは、人をして安心立命の地を得しむるにあり。安心立命とは所詮死を安からしむるの謂に非ずや。道德は現世の爲にのみ存するものにあらず。名譽の不朽を思ひ、事業の永遠を言はば、是即ち死後の世界を言ふなり。あはれ其の生を見て其の死を見ざる者は、人生の根本を遺れたり。死はすべての物の終にして、又すべてのものの始なればなり。されば人々死を考へよ。死を考ふるは即ち人生の目的を考ふるなり。如何にして生くべきかの問題は、即ち如何にして死すべきかの問題なり。死を考ふるは、死滅を考ふるに非ずして、永生を考ふるなり。死は人生の究竟なるが故に、永生は人生の目的なり。

安心立命

かの生死の優劣を爭ひ、人生の價値を疑ふものは、愚なるかな。吾等は生を知る、未だ死を知らず。如何ぞ其の優劣を

絶對　實在　魂魄

知らんや。人生の價値は絶對なり。他に比すべきものなし。「厭世」と謂ひ「樂天」と謂ふ「吾等其の何の意なるを知らず。吾等は唯人生の實在せるを矩るのみ。

されば吾等は生きざるべからず。永遠に生きざるべからず。死は萬物の運命なり。されど吾等は死を超絶して其の永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得んか。人生究竟の問題茲に集まる。

世に神に禱りて永生を求むるものあり。佛に願ふものは、人生の倏忽を歎きて、涅槃の寂寞を求む。されど形體を離れて魂魄無きを如何にすべき。其の憤墓を壯大にし、金を鏤め、石に刻して、名の後世に傳らんことを求むるものあり。されど「時」は凡ての物の破壞者なり。風雨幾歳、時移り、人渝

桑滄　蕩々汨々

り、桑滄幾度か變轉して墓標獨り全きを得べしや、否や。是の如きは永生の道に非ざるなり。

まことのな生は名永よりて生くるに非ずして、事によりて生くるなり。儒教の存する所、今尚孔子あらざるは無く、佛寺の建つところ、到る所に釋迦あり。耶蘇は十字架にかゝれりと雖も、今尚基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激する者の胸には、楠公の生命あり。蒸氣機關の動く所には、ワット*の血液あり。電氣の線のかゝる處は、即ちフランクリン*が永生の地にあらずや。まことの永生は時と共に深さを加へ、人と共に廣さを加ふ。されば一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々汨々として、遂に世界を動かさずんば已まざるべし。二十世紀の文明は、是

K220,8

の如き幾多永生の結果に外ならざるなり。

我が少年諸子よ。諸子は曾て死を考へし事ありや。其の年の弱きを以て早しとする勿れ。死を思はずして生くるは、空しく生くるなり。其の死をして恨無からしめんと欲せずして、獨り其の生の完からんを望むは、これ目的なくして道を歩むなり。死を思ふは即ち永生を思ふなり。而して最も好く是の問題を解決したるものは哲人傑士なり。

（高山林次郎）

大正讀本　卷八　終

236
109

大正元年十月廿八日印刷
大正元年十月卅一日發行

著作者　藤村作

發行兼印刷者　東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地　大日本圖書株式會社
右代表者　專務取締役　宮川保全

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
大日本圖書株式會社
郵便振替貯金口座　東京二一九番

發行所

各府縣下　特約販賣所

不許複製